

衆議院議員

柿沢未途



- 1971年生まれ、江東区立数矢小、麻布中・高、東京大学法学部卒業
- NHK記者、都議2期、衆院4期
- みんなの党政調会長代理、結いの党政調会長、維新の党政調会長・幹事長、民進党役員室長、衆議院予算委員会理事などを歴任
- 厚生労働委員会、無所属の衆院単独会派「新エネルギー運動」で国会活動中



写真提供：共同通信社

「災」の時代より 新しい御代へ

平成の御代が天皇陛下のご退位とともに幕を閉じ、皇太子殿下のご即位とともに新しい御代の幕開けを迎えます。わが国の平和と繁栄をお祈りされ、いつも国民に寄り添われ、国民と苦楽をともにしてこられた、時代に即した新しい象徴像をつくり上げられてきた天皇皇后両陛下には、国民のひとりとして、心からの限り感謝と敬意を申し上げます。天皇・皇后両陛下の考え方をそれぞれ象徴しているのが、災害被災地への訪問をされる時のお姿ではないでしょうか。防災服のようなジャンパー姿で避難所の体育館に来られ、打ちひしがれた被災者の皆さん一人ひとりに、ひざ

をついて声をかけられる。そのお姿は、国民の誰もが脳裏に焼きついているのではないのでしょうか。

平成の御代は、「災害」の記憶と切り離せない時代となりました。阪神・淡路大震災、東日本大震災と原発事故により、国家的危機といってもよい事態を私達は経験しました。多くの人々の命が失われ、故郷の山河が無残に傷つけられました。

防災士資格を持つ国会議員として

平成も終わろうとする平成30年も、これまでにない大規模な自然災害が次々に発生した一年でした。（中面へ続く→）

7月の西日本豪雨災害では、長時間続いた集中豪雨による河川の氾濫と土砂崩落により、近年の水害では未曾有の死者224人を出しました。気象庁が「特別警報」を出し、記録的な水害につながるとの警鐘を鳴らしたものの、誰もが予想できなかったような異常な降雨量と河川の増水で、夜間のあつという間に、地域が丸ごと、あふれた水に呑み込まれていきました。

災害直後には40℃という過酷な暑さが被災地を襲いました。被災者の皆さんはもとより、自衛隊や警察・消防の皆さん、行政機関の皆さんも、酷暑の中での作業に疲弊していました。土砂の搬出や家屋の整理をするボランティアの皆さんは、あまりの暑さに、熱中症でバタバタと倒れていきました。医療用にも使われる脱水症状を防ぐための経口補水液OS-1をあるだけ送ってくれ!という悲鳴が上がったほどです。

その中で感じたのは、断水といったライフラインの破断がもたらす住民生活への影響の深刻さです。

被災地では支援に駆けつけた自衛隊や全国の水道局の給水車により、給水所が各地に設けられ、飲み水の供給は行なわれていました。しかし、ポリタンクを持って満タンに給水したら20リットル、つまり20キロの重さになります。20キロのポリタンクを家に持って帰るのは、高齢者世帯には非常に困難だと感じました。

これが東京都心の高層マンションだったらどうでしょう。例えば24階に住んでいたなら、エレベーターが動かない中、20キロの水が満タンのポリタンクを持って、階段を上がって24階の自分の

部屋に戻られなければならないのです。考えただけでその困難が分かるでしょう。

断水地域のトイレ問題にとりくむ

加えて、給水所で飲み水は確保できても、トイレを流すだけの水の量はありません。被災地の断水地域で、自宅で生活する方々の大きな悩みの一つがトイレの問題でした。トイレを流せないで、なるべく行かなくて済むように、水も食事を取らない、そうしているうちに猛暑の中、体調を悪くしてしまう話を、あちこちで聞きました。

阪神・淡路大震災でも、東日本大震災でも、トイレの問題が生じました。避難所の仮設トイレが満杯になり、そのまま放置され、衛生上の問題を引き起こす。トイレが使えなくなり、困り果てた被災者が、穴を掘って用を足す…。およそ先進国の日本で起きているとは思えない不衛生かつ劣悪な状況が現実のも

のとなりました。そこから災害用トイレの問題に取り組むようになりました。石巻赤十字病院で災害医療コーディネーターとして陣頭指揮を取った石井正医師に教えて頂き、断水地域でも使える、水を使わない、ラップで密封して衛生的に処理できる、新しいタイプの災害用トイレ「ラップポン」と出会いました。熊本地震では南阿蘇村の避難所でノロウィルスの集団感染が現に起きてしまい、「ラップポン」のようなトイレの重要性がクローズアップされました。

今回の西日本豪雨災害の被災地でも、断水でトイレにお困りの老人福祉施設や、地域の集会所に、私達から出向いて「ラップポン」の設置を行なう、いわゆるプッシュ型の支援活動をメーカーの皆さんと行なってきました。現地では本当にトイレでお困りの方々が多く、「助かった!」と、大変、喜ばれました。これまで積み重ねてきた災害現場での

広島県呉市、老人福祉施設に「ラップポン」設置



「ラップポン」で断水地域のトイレ問題解決



倉敷市真備町にて



倉敷市真備町の避難所で

倉敷市真備町、河川決壊被害の爪跡



倉敷市真備町、気温37℃



ポリタンクで給水を受けてのぐ



経験から、単に現地視察するのではなく、実際に人助けに貢献できる活動ができるのが私の強みだと思っています。

北海道安平町のリーダー・ 及川町長

北海道の震度7の地震でも、断水地域での「ラップボン」の設置に走りました。山腹が爪を立てたように崩落したヘリコプターからの映像を覚えている方も多いと思いますが、土砂崩落で浄水場が埋まって使用不能になってしまい、やはり断水が長引いていました。北海道全域におけるブラックアウトによる長期停電と合わせ、停電・断水といったライフラインの途絶の深刻な影響をあらためて実感しました。



震源地の厚真町、安平町の町長ともお会いしました。いずれも町長室に泊まり込んで住民のためにご奮闘中でした。中でも安平町の及川秀一郎町長は、町のコミュニティテレビ「あびらチャンネル」で町役場の災害対策本部会議をそのままノーカットで住民向けに放送したり、給水所やお風呂の情報を文字放送で周知したり、自ら乗り込んだヘリコプターから、上空からの山腹崩壊の映像を流したり、ソフトバンクから提供されたタブレットをボランティアに渡して被災世帯の一軒一軒の状況調査を進めたりと、あらゆる人脈やツールを駆使して、住民の不安解消のために精力的に動いておられました。判断のスピードも速く、素晴らしいリーダーだと感銘を受けました。

江東区からの移住者も

河川の決壊で地域全体が浸水し、自宅で溺れ死ぬ悲劇も生まれた岡山県倉敷



及川秀一郎・安平町長



市真備町。避難所で聞いた言葉が印象に残っています。

「倉敷は災害のない、良い街だと思っていた。だからちょっとやそっと雨が強くても、避難の呼びかけがあっても、大丈夫だろうと思っていた。」

「気付いた時は玄関先まで大量の水が押し寄せていて、もう逃げようにも逃げられなかった…」

そのぐらい、現地の皆さんは、「ここは安全なところ」と思い込んでいたのです。現に私達の住む江東区から、「首都直下型地震があるから、災害のない田舎に移住します」と言って、倉敷市真備町を選んで引っ越していったご夫妻がいらっしゃるほどです。7月の西日本豪雨災害直後に訪ねましたが、災害がないと思った真備町で、家が2階まで浸水し、被災者となって、猛暑の避難所でがっくり肩を落としていました。



どこにいても大規模自然災害のリスクとは無縁ではられないのが日本列島です。北海道の胆振東部だって、ここで震度7の直下型地震が起きるなんて、住民の皆さんはもとより、地震学者だって想定していなかったでしょう。

大規模自然災害は、いつ、どこでも起こる。万が一のその時、わが身に、家族に、何がふりかかるのか。平時の今の時点でリスクを見極め、万全の備えを講じておく必要があります。高層マンションなら浸水は回避できても、停電すればエレベーターは止まるし、水も出ないし、トイレも流れません。非常用発電機を動かす重油は備蓄量が限られ、数時間動かしたら燃料切れで電気は止まります。

「想定外」は許されない

平成の次の御代は、あらゆるリスクから目をそらさず、想定外をつくらない、未来に起きるできごとへの果敢な挑戦を必要とする時代となるでしょう。リスクは自然災害に限りません。国際情勢、安全保障、政治、経済財政、人口構成の変化、社会保障制度、あらゆるところにリスクが潜んでいます。

「今まで大丈夫だったから、これからも大丈夫だろう」

という思い込みが通じない、時代と時代の画期と肝に銘じて、政治家として歩んでまいります。

ラグビーW杯日本大会の成功へ 釜石復興スタジアムの 完成式典を訪問

釜石鶴住居復興スタジアムで五郎丸選手と

今年はいよいよラグビーW杯日本大会の開催イヤーを迎えます。オリンピック、サッカーW杯と並んで、世界の3大スポーツ大会に位置づけられ、2015年のイングランド大会は観客動員247万人、世界のテレビ視聴者は40億人を数えています。

麻布高校でラグビー部だった私も、経験者として、ラグビーW杯の成功に向けて取り組んできました。中でも感慨深いのは、岩手県釜石市でのW杯公式試合の開催です。

釜石市は、松尾雄治選手をはじめとする新日鉄釜石が日本選手権7連覇を果たした、日本ラグビー史に輝かしい名前を刻んだ地です。そして8年前には東日本大震災による大津波で壊滅的な被害を受けました。

釜石市ははじめ三陸沿岸ではコンクリートの防潮堤の建設が進み、コンクリートが遮って海が見えない光景は、複雑な気持ちを抱かせます。



防潮堤で海が見えない三陸沿岸

一方で、釜石市は、震災前から津波防災教育が行なわれてきた成果で、小学生の子ども達が自ら高台に逃げて、大人の手を引いてリードし、多くの人命を救った、鶴住居小学校の「釜石の奇跡」でも知られています。

その釜石でW杯を開催し、震災復興の象徴にしたい、と、立ち上がったのが、松尾雄治さんら新日鉄釜石の往年の選手達でした。「スクラム釜石」というNPOを設立し、気運の盛り上げに取り組んできました。

私も2013年の予算委員会で「釜石でラグビーW杯を」と安倍総理に直談判しました。それも後押しとなって開催が実現し、「釜石の奇跡」の鶴住居地区に復興のシンボルとしてスタジアム建設が決まりました。

野田武則・釜石市長によれば、当初は「こんな時にラグビーなんて」という声が多く、とても地元から誘致を口に出せる雰囲気ではなかったそうです。「だから柿沢代議士に東京から応援してもらったのは心強かった」と、しみじみ回想しておられました。

そして2015イングランド大会、エディー・ジョーンズ率いる日本代表が南アフリカを破り、世界をあっと驚かせる大活躍を見せた頃から、住民の見る目が変わってきました。「冷ややかだったおばちゃんが、五郎丸選手を見て目の色を変えた。五郎丸選

手のおかげだ」と野田市長は言っておられました。

こうして昨年8月、釜石市の鶴住居復興スタジアムは落成式典を迎えました。

「釜石の奇跡」の地にできた、記念すべきラグビースタジアム。落成式典にあわせて私も足を運びましたが、ちょうど五郎丸選手と顔を合わせました。12月の「柿沢未途君を励ます会」でも、ラグビー界のレジェンドとも言える元日本代表の吉田義人さんに駆けつけて頂き、1500人のご来場者の前で、日本大会の成功を誓い合いました。その勢いを、オリンピック・パラリンピックの成功につなげたいと思います。



野田武則釜石市長と



励ます会・吉田義人さんと

江東区で柿沢未途と連携して戦ってくださる 区議会の仲間の皆さん

江東区議会議員選挙は、今春 2019年4月に予定されています。



江東区議会議員
白岩忠夫



江東区議会議員
福馬えみ子



江東区議会議員
いたつ道也



江東区議会議員
鈴木きよと



江東区議会議員
鬼頭たつや



江東区議会議員
鈴木あやこ



江東区議会議員
吉田要



江東区議会議員
やしきだ綾香



前江東区議会議員
新島つねお



前江東区議会議員
じんのゆずる